

大乘

DAIJO 法話

聞くべきこと



兵庫・善教寺副住職
あかい ともあき
赤井 智顕

私たちは日々、さまざまなことを聞き、さまざまなものと出会いながら、人生を送っています。しかし、何を聞き、何と出あうのかによって、人生は大きく変わってくるのではないのでしょうか。人としての「いのち」を生きていく中に、聞くべきことを聞き、遇^あうべきものと遇わせていただいた人生こそが、お念仏の人生であると教えていただきます。

忘れられないご門徒の女性がいます。はじめてお会いしたのは、今から二十年ほど前のこと

が、この方には決まった習慣がありました。それは、おつとめの最後にいつも、「阿弥陀さま、お釈迦さま、七高僧さま、聖徳太子さま、ご開^{かい}山^{さん}さま、蓮如さま、お父さま、お母さま、有縁の善知識^{ぜんじしき}のみなさま方、仏法への尊いお導きをいただき、誠に有り難うございました」と、ご本尊の阿弥陀さまに向かって、お礼をおっしゃることでした。ご自身の人生の中で、浄土真宗のみ教えと出遇われたことを、心からよろこばれた方でした。けれど歳を重ねるにつれ、徐々に身体は病に冒されていきました。

晩年は、お宅へお参りにうかがっても、座っておられるだけでつらそうな様子でした。けれどもそんな折、黙々と親鸞聖人のお書物を書き写しておられる姿がありました。

で、当時、七十代半ばの方でした。阿弥陀さまのお慈悲の心、浄土真宗のみ教えをよろこばれた方でした。しかし、若い頃は、ご自身の救い^{きうい}のことで、ずいぶん悩まれたそうです。そんな時に出遇われた教えが、「南無^{なむ}(まかせよ) 阿弥陀仏(われに)」と告げてくださる、阿弥陀さまの本願の救い^{きうい}でした。その後、縁あって、自坊^{じぼう}のご門徒となられた方でした。

自坊では月参りの習慣があります。私も度々、その方のお宅へお参りに寄せていただきました

「お体にさわるから、あまり無理しないようにしてくださいね」と私が言いますと、「こうしていると元気が出るんです。お聖教^{しょうきょう}と向き合わせていただくことほど、有り難いことはありません。往生^{おうじょう}とは往き生まれる。こんな私がお浄土で仏と成らせていただいて、またこの世で仏法をお伝えする身と仕上げてもらえる。お陰^{かげ}さまでそのことを聞かせていただきました。私はほんとにしあわせ者です」
そうニコツと笑っておっしゃったお顔を、今でも忘れることができません。

その後、入院されて病院へお見舞い^{みまひ}にうかがいますと、そこにはもう起き上がることも、話すこともできない姿がありました。しかし、そんな中であってなお、胸の前で手のひらを合わ

せて合掌され、かすかに動いている口からは、「ナンマンダブ ナンマンダブ」と、お念仏がこぼれていました。

最後のお見舞いから数日後、ご往生の一報を聞き、自坊でご葬儀を執り行いました。ご葬儀が終わった後、遠方へ嫁がれている娘さんから、こんなお話を聞きました。

「晩年、病気が進行するにつれ、母の体は動けなくなり、一人では何をすることもできなくなっていました。私は母が一人でさびしく、つらい日々を送っていないかと、ふと心配になって、『ねえ、お母さん、大丈夫？ さびしくない？』って聞いたことがあるんです。そして母は、『大丈夫、さびしくない。だって母さんの人生は阿弥陀さまが一緒に人生だよ。あ

と母さんの最期が、どんな死に様であっても、間違いなくお浄土に生まれて、仏さまと成らせていただくから、くれぐれも心配しないように。聞くべきことは、もう聞かせてもらったよ』って言うてくれたんです。私は母の言葉を聞いて、反対に安心させられると同時に、母が本当にしあわせな人生を送っていたことに、心からうれしく、尊く思いました」

親鸞聖人は、『教行信証』のはじめに、

ここに愚禿積の親鸞、慶ばしいかな、西蕃・月支の聖典、東夏(中国)・日域(日本)の師釈に、遇ひがたくしていま遇ふことを得たり、聞きがたくしてすでに聞くことを得たり。

(註釈版聖典132ページ)

とおっしゃっています。それは、まことに遇い



カット 長井多美栄

難い阿弥陀さまの本願の救いに、今、遇い得ていることを、聞き難い本願の救いを、今すでに聞き得ていることを、心からよろこばれたお言葉でした。インド・中国・日本へと、脈々と伝承されてきた祖師方の教説によって、今ここで「南無阿弥陀仏」の本願の救いを聞きよろこび、お念仏の人生を送らせていただいているわが身の不思議をよろこばれていかれたのです。

聞くべきことを聞かず、遇うべきものとも遇わずに人生を終えていくことを空しい人生と言うのであれば、聞くべきことを聞き、遇うべきものと遇わせていただく人生は、豊かでしあわせな人生と言えます。「聞くべきことは、もう聞かせてもらったよ」——そう言える人生こそ、今ここにいただいているお念仏の人生なのです。